近世文学における楠正成伝説の再生

――南朝復興の物語への転換をめぐって

李（イ）　忠澔（チュンホ）

一．はじめに

近世期において芝居や小説の世界で繰り返し再生産された正成伝説は、近世の諸文学ジャンルの中に受容されていく過程で、正成伝説単独の世界だけではなく、各々のジャンルの特徴を吸収しながら、より豊富なバリエーションを持った物語として成長・展開していましたが、その中で当時の巷談や巷説を記録した実録とも結合することになります。本発表では、正成伝説と実録との綯い交ぜについて考察しながら、正成伝説が近世文学の中で定着していく過程において主家復興の物語として変貌していくことを論じたいと思います。

それでは、まず由比正雪①が幕府転覆を図った慶安事件を題材にした慶安太平記物と正成伝説が結合していく過程を考察します。

二．慶安太平記物と楠正成伝説――由比正雪と楠正成との結びつき――

慶安事件は慶安４年（1651）７月、軍学者由比正雪が企てた反乱が未然に鎮圧された事件です。この叛乱計画に荷担した牢人の数は、一説におよそ五千人ともいう大規模なものでしたが、この計画は、７月23日夜の数人の訴人によって露顕し、ついに実現しませんでした。

この事件に荷担した牢人が五千人にも及んだことには、当時大量に発生した牢人問題が背景にあります。おもに幕府による大名・旗本の改易・減封によって生みだされた江戸時代初期の大量の牢人らは、元和以来、平和と秩序の維持

をめざす幕府・諸藩から危険なものとして抑圧され、[2] 事件のおこった慶安期ともなると、再度の仕官の機会も消失し、その生活は窮迫して不満は大いに募っていました。

当時旗本や大名家中の武士に軍学を講じ、弟子からは軍法の大家として尊敬を集めていた由比正雪は、その身辺に仕官の周旋を望んで集まってきた牢人を語らって叛乱を起こす計画を立てたのです。[3]

本発表で取り上げる慶安太平記物とは、この由比正雪の騒擾事件を実録体小説としたもので、記録的なものを脱して小説風になった最初は『油井根元記』（五巻一冊、天和２年〈1682〉序）ですが、[4] もっとも広く流布したのは『慶安太平記』です。『慶安太平記』は早くから講談の材となっていたので、明和頃（1764 ～ 1772 年）までに大体は成立していたものと推測されます。[5] その梗概は次の通りです。

駿河国由井村の染物屋の一子である富士太郎が由比正雪と称し、立身のため日本中をめぐる武者修行に出ます。天下を覆すという野心を抱いていた正雪は、江戸に出て軍学者楠不伝の跡目を謀略によって相続し、楠家の系図一巻と菊水の紋の旗を持って楠正成の子孫を自称します。さらに紀伊徳川家の眷顧として門人や浪人を集め、その中には丸橋忠弥、柴田三郎兵衛などが参加し、江戸・駿河・京都・大阪で同時に挙兵し、幕府を転覆する計画を立てました。ところが、江戸の丸橋忠弥が軍用金の調達過程で計画を幕府に知られ、忠弥は捕えられて斬罪、正雪は駿河で自刃、以下一党もそれぞれ決着がつくというものです。[6]

ここで注目したいのが、由比正雪が楠正成の子孫を自称したことです。幕府転覆という大望を抱いている由比正雪は「楠民部助橘正雪」と楠正成の嫡流であることを自称します。

正雪がその子孫であることを自称した南北朝時代の武将である楠正成は、『太平記』において後醍醐天皇の霊夢によりその舞台に登場し、忠臣として活躍を見せます。その最期となる「湊川の戦い」では、七度生まれ変わっても後

醍醐天皇に仕えて朝敵を滅ぼさんとの誓いを立てた忠臣として、また熱湯の計や藁人形の偽計をはじめとして奇抜な兵法を駆使する智略家として今日も知られています。

元禄５年（1692）に水戸光圀が摂津湊川に「嗚呼忠臣楠子之墓」を建立した事に象徴されるように、正成は江戸期には忠臣の模範として称えられていました。江戸時代になると、楠正成は知略のみならず、高邁な人格の面においても称揚せられ、楠正成は盛んに顕彰の対象とされていきます。しかし、このような正成の姿は、あくまでも主に儒学者たちによって教訓・訓戒のために造られた正成像であり、正成像には多様な面が混在しており、由比正雪が正成に私淑したのも、様々な正成像の一面に感服したことに所以すると思われます。

それでは、幕府転覆を図る由比正雪のような者が忠臣の模範として尊崇されていた正成の嫡流を自称する理由は何に基づくのでしょうか。即ち、物語の成立過程において正雪が正成になぞらえられる要因はどこにあるのでしょうか。『慶安太平記』において、正雪が正成に私淑するに至る発端は、幼少時に諸葛孔明に匹敵する第一流の兵法者として正成の名を認識した場面に見られます。そしてその後、才能よりも家柄が重視される世の中を渡る手段として、自らを楠正成の子孫として仕立て上げていきます。

この由比正雪の幕府転覆、階級秩序の乱れというテーマの淵源に存在しているのはアウトローとしての楠正成です。これについては兵藤裕己氏の先行研究にその関わりが明確に提示されています。

兵藤裕己氏によると、こうして自身に正成の姿を投影していく正雪の姿が描かれるに至った背景には、物語の成立に深く関わった語り手達⑦の存在が大きいと指摘されています。つまり、それぞれに出自が明らかではなく、階層的に社会の底辺にあった正成⑧・正雪・語り手はその共通性を媒介として繋がり、その中でその理想化された姿が投影されていく構造が存在しています。したがって、大衆レベルにおいての楠正成のイメージは、『慶安太平記』において天下を覆そうとする大望を持って自ら「楠民部助橘正雪」と称する由比正雪のイ

メージを媒介として認識されているといえます。[9]

それではここで言及されているアウトローとしての楠正成の姿はどこから発生したものでしょうか。それは『太平記』原典における楠正成の登場と密接な関連を持っていると思われます。

まずもって、楠正成はその最初の登場から神秘的な雰囲気を漂わしています。彼を呼び出したのは他でもなく、笠置に落ち危機に晒されていた後醍醐天皇でした。

元弘元年（1331）8月、倒幕の計画が露見すると後醍醐天皇は笠置に臨幸して籠城しますが、天皇のために集まってくる近国の兵は手勢が少ないことから有力な武士を集めることもできず、警固もままならない状況でした。そのような中で、ある日後醍醐天皇の夢の中に二人の童子が現れ、奇妙な内容を告げます。

> 此勢計ニテハ、皇居ノ警固如何有ベカラント、主上思食煩ハセ給テ、少シ御マドロミ有ケル御夢ニ、所ハ紫宸殿ノ庭前ト覚ヘタル地ニ、大ナル常盤木アリ。緑ノ陰茂テ、南ヘ指タル枝殊ニ栄ヘ蔓レリ。其下ニ三公百官位ニ依テ列坐ス。南ヘ向タル上座ニ御坐ノ畳ヲ高ク敷、末座シタル人ハナシ。主上御夢心地ニ、「誰ヲ設ケン為ノ座席ヤラン。」ト怪シク思食テ、立セ給シタル処ニ、鬢結タル童子二人忽然トシテ来テ、主上ノ御前ニ跪キ、涙ヲ袖ニ掛テ、「一天下ノ間ニ、暫モ御身ヲ可レ被レ隠所ナシ。但シアノ樹ノ陰ニ南ヘ向ヘル座席アリ。是御為ニ設タル玉扆ニテ候ヘバ、暫ク此ニ御座候へ。」ト申テ、童子ハ遥ノ天ニ上リ去ヌト御覧ジテ、御夢ハヤガテ覚ニケリ。[10]　（引用中の句読点は筆者が適宜補った。以下同。）

夢の中で、後醍醐天皇は南へ向いている上座に末座している人がいないことを訝しんでいると、二人の童子が現れ、木の陰で南へ向いている玉座は天皇のために設けられたもので、傍線部のように、「一天下ノ間ニ、暫モ御身ヲ可レ

被レ隠所ナシ。但シアノ樹ノ陰ニ南へ向ヘル座席アリ。是御為ニ設タル玉扆ニテ候ヘバ、暫ク此ニ御座候へ。」と言ってその玉座に座るよう告げます。後醍醐天皇はその夢告の内容を解いて「木ニ南ト書タルハ楠ト云字也。」と悟り、笠置の律僧に近辺に楠氏の武士が居るか尋ねた所、河内国金剛山に楠多門兵衛正成という武士が存在するというので、すぐさま使者を送って正成を召し出します。

このように、正成は夢告でもなければ天皇にその存在さえ知られない身分であり、河内の一土豪が君臣上下の枠組みを飛び越えて天皇に直結する事で、日本社会のヒエラルキー秩序の下部を占めていた人々のエネルギーを代弁する存在になります。[11] このような正成の出自がアウトローとしての正成のイメージを創り出している一つのソースです。

このようにアウトローとしての正成伝説と密接な関係をもって流布して行った『慶安太平記』は浄瑠璃においては南朝復興の物語として展開していくことになります。これは逆に正成伝説が慶安太平記物を吸収しながら近世文芸ジャンルの中で展開していたとも言えるでしょう。

それでは、時代浄瑠璃において慶安太平記物と南朝遺臣たちの南朝復興物語が結合していく過程を見てみましょう。

三.『太平記菊水之巻』――幕府転覆と南朝復興の結合――

竹田小出雲・二歩堂・近松半二・北窓後一・竹本三郎兵衛・三好松洛合作の『太平記菊水之巻』（宝暦 9 年〈1759〉9 月 16 日大阪竹本座初演）は、その角書の「南朝正平四年北朝貞和五年」から分かるように、南北朝の内乱に世界を設定して、由比正雪・丸橋忠弥の幕府転覆の陰謀を描いており、この作品によって幕府転覆と南朝復興が同一線上に論じられることになります。それぞれ人名を宇治常悦・鞠ヶ瀬秋夜とし、さらに正雪が楠氏の子孫と称したことから常悦を楠正行の変名としました。その梗概は次のとおりです。

南北朝時代の室町幕府第 2 代将軍である足利義詮は、楠正成が討死した後に

も父の遺訓に従って南朝復興のために戦いを続けていた楠正行・正儀兄弟を討つべく高師泰の軍をさし向けます。四条畷で敗れた正行は、妻秋篠と共に宇治に住む夢判じ紺屋在兵衛の許に身をよせましたが、ここで自分は在兵衛こと佐々目憲法の子で、真の正行はこの家の聟勇助なることを知り、わざと敵を欺くため自刃します。真の正行は宇治常悦と名乗り、紋を菊水に改めます。一方正儀は奴照平となり、足利侍従之助氏満の家老石堂勘解由の妹千束と駆け落ちします。石堂勘解由は主君を放埒として追い、わが子花石を後嗣に立てていましたが、実はわが子を犠牲にして錦の旗を盗んだ罪から主人を守る苦肉の策でした。足利覆滅を企てる宇治常悦はこの石堂を同志に加えようとしましたが、その主人への忠誠心に感じて思い止まり、細川頼之の家臣刎川主膳こそ鞠ヶ瀬秋夜（実は新田義興）と見抜き、共に南朝のための挙兵を約します。しかし秋夜は具足屋藤兵衛の訴えにより捕縛され、常悦は石堂から南北両朝和睦を聞き切腹します。⑫

以上のように、慶安太平記物の登場人物と正成伝説の主要人物を入り混ぜて複雑な展開になっていますが、物語の主眼は南朝復興をめざす楠家の一族たちの活躍においてあります。

それでは、『太平記菊水之巻』において楠家の遺臣たちが南朝復興の正当性を語る部分を検討して見ましょう。

宇治常悦、すなわち正行は四条畷への出陣の際、吉野の皇居を守るために残しておいた正儀が戦場に駆けてくると、それを諌めて次のように語ります。

> 今兄弟共討死せば、君の叡慮を苦しめん。汝は跡にながらへて、楠家の旗棹、終には天下にひるがへせ、死るも残るも南帝の御為。かく大軍を受ケたる正行、若も運命拙くば又逢事も是限り。よしそれも武門の常、君が為に捨る命露ちり何か惜からん。⑬

傍線部のように、「死るも残るも南帝の御為。」「よしそれも武門の常、君が

為に捨る命露ちり何か惜からん。」と、ここでは正行は南朝の天皇のために命を捧げることを誓っており、すでに自分の死を予想し覚悟しています。これは楠正成の「七生滅賊」の論理がそのままその一族へも受け継がれていることを意味します。そして、南北朝合一を伝えながら、今後も生き残り北朝の忠臣として仕えることを勧める石堂に対して正行は次のように語ります。

> 先達て討死せし正行が事忘れたか。常悦と改名せし。此正行が最期の詞。いひ聞すよつく聞ケ。我レ南朝に有ル内は。南北の軍止事なく。天下の乱れ万民の歎き見るに忍びず。謀叛人と成ツて生害せば。自然と和睦も調はんと。未前を察して逆徒と成リ。本望とげたる今日たゞ今。討ツ手に向ひし石堂勘解由。反逆人を助ケては日本国法立タず。常悦が首よりも汝に渡す賜有。⑭

傍線部のように、「我レ南朝に有ル内は。南北の軍止事なく。天下の乱れ万民の歎き見るに忍びず。謀叛人と成ツて生害せば。自然と和睦も調はんと。未前を察して逆徒と成リ。本望とげたる今日たゞ今。討ツ手に向ひし石堂勘解由。反逆人を助ケては日本国法立タず。常悦が首よりも汝に渡す賜有。」と、ここで、正行は自身が南朝の遺臣として生きている限りには南北朝の戦いは止まらないだろうと言っています。そして、そうなると、天下の乱れや万民の苦しみは続くことになるので、自らが謀反人になって自害すれば、おのずから南北朝は合一すると石堂を説得しています。つまり、ここで正行は天皇のために戦うことが、幕府に対しては謀叛人または逆徒・反逆人となることを述べていると考えられ、南朝復興を目指して二代続けて戦ってきたものの、戦乱で苦しめられている民衆のことを思うと、自ら命を絶って内乱を終息させることが最善だと判断しています。

このように、物語の最後で宇治常悦実は正行は石堂から南北朝合一の知らせを聞いて自害しますが、これは幕府転覆の計画が失敗した後、自決を選ぶ由比

正雪の最期を連想させます。由比正雪は仕官の機会も消失し、その生活が窮迫していた牢人たちの勢力を糾合して幕府に反旗を挙げましたが、事前に発覚しあっけなく自害します。これは幕府転覆を目標としている点においては、南朝復興を目指している南朝の遺臣らが足利幕府を打倒しようとすることと一脈相通ずるとも言えますが、由比正雪は個人の出世や立身のために当時の社会不満勢力を利用した点からみると、幕府転覆の大義名分においては南朝復興とは性質を異にするものであると思われます。

こうした両者の相違にもかかわらず、江戸時代の人々が両者をある種同一線上において享受していた理由は、先述した兵藤氏の先行研究で言及されているように、社会の下層部に存在していた楠正成・由比正雪・語り手たちの同質意識へと求めることができると考えられます。

このように、『慶安太平記』における由比正雪と楠正成の結びつき方が、ただ正雪が正成に私淑し、その後胤であることを自称したという点にとどまっていたのに対して、『太平記菊水之巻』では、正雪の江戸幕府転覆をめぐる物語が南朝遺臣らの南朝復興の物語と結合することにより、謀反と復興という次元を異にする事柄が交わることになります。

『太平記菊水之巻』以降にも、正成伝説はそれぞれの時代における巷談・巷説を交えながら、南朝復興の物語として展開して行きますが、まず、慶安太平記を媒介にして宮城野信夫譚と正成伝説が結合していく過程を見ましょう。

四．宮城野信夫譚と正成伝説

宮城野信夫の敵討譚が正成伝説と関わりを持つことになるのは、慶安太平記物の中で最も広範に流布した『慶安太平記』に挿入されてからです。『慶安太平記』には多くの挿話が見られますが、その中の一つが宮城野信夫譚で、ここでは由比正雪が宮城野信夫姉妹の敵討に助太刀するという話になっています。その梗概はつぎのとおりです。

父親が討たれた後、姉妹は江戸に出て、当時軍学兵法で評判の高かった由比

正雪を訪れ、親の敵討を志すに至った事情を話します。由比正雪は姉妹が農民の子であるにもかかわらず敵討を志していることに感服し、姉妹に助力することを決意します。そして、姉妹の名をそれぞれ姉を宮城野、妹を信夫と改めて姉に陣鎌・手裏剣、妹には薙刀を教え、それによって姉妹は敵討の宿願を果たします。その後、二人の姉妹は謀叛が露見して処刑された正雪の首を乞い、礼をもってそれを葬り、懇ろに弔ったということです。

この宮城野信夫譚には親への孝行と社会秩序の紊乱という二つの側面がありますが、『慶安太平記』においては、由比正雪も宮城野信夫も社会秩序を乱した者という共通点から結びついています。この社会転覆や階級秩序の乱れといったテーマの淵源に存在しているのがアウトローとしての楠正成です。

『碁太平記白石噺』（安永９年〈1780〉刊）は由比正雪が女敵討に助太刀をしたという『慶安太平記』のエピソードを元にし、その中に吉原の遊女となった姉の宮城野と、田舎から江戸にやってきた妹信夫が父の敵を討つという敵討の筋を織り込んでいます。その内容は由比正雪が登場する慶安事件と正成の伝説とを結びつけた『慶安太平記』に、宮城野信夫の敵討を組み入れるという複雑な筋立てになっています。その梗概は次のとおりです。

南北朝末期、奥州白坂城逆井村の百姓与茂作の田に武士の志賀台七は天眼鏡を隠します。娘おのぶ（信夫）が家に戻っている間に、鏡を見つけた与茂作を台七は殺します。庄屋七郎兵衛たちは台七を責めるが、あぶれ者の仕業であると言って殺害を認めません。そこで浪人の金江谷五郎が敵と誤解されるが、結局台七が犯人と判明します。浪人の宇治兵部助も現れ、おきの・おのぶ姉妹の敵討に助力を約束します。また、兵部助は常悦正之、谷五郎は勘兵衛正国と名乗りを改めて、自分たちが南朝の生き残りであることを明かして南朝復興を目指します。全盛の傾城だった宮城野は惣六（新田の家臣島田三郎兵衛）の計らいで廓を出ます。おのぶは信夫と名を改め、常悦の妾おせつの元で剣術修業に励みます。常悦は台七から剣術指南楠原普伝相伝の兵器の秘法を聞きだすため、妖術を使って台七を現じさせ、姉妹に討たせて奥州へ帰郷させます。秘法を聞

きだした後、台七を誘い、改めて姉妹に台七を討たせます。

宮城野信夫の敵討譚が実録化する段階においては、『慶安太平記』の一挿話として慶安太平記物と連動して広がっていましたが、浄瑠璃の慶安太平記物『碁太平記白石噺』においては南朝復興を志す南朝遺臣たちの物語として改変され、正成伝説と深く関わっています。そこにはもちろん幕府転覆という不穏な内容をカムフラージュするという意図が大きく関わっていたことは言うまでもありませんが、[15] 同時にこのことが宮城野信夫の敵討譚が正成伝説と融合していく流れを作り出していくことになります。そして、このような再構成は物語の本質にかかわる最も重要な変化といえます。

『慶安太平記』では物語の本質は由比正雪の「幕府転覆」にありましたが、『碁太平記白石噺』では物語の本質が「南朝復興」に置き換えられます。ところが、姉妹の敵討譚の内容は変わらずに存続し、宮城野信夫姉妹の行動を追ってストーリーが展開します。その結果、徐々に物語の主客が転倒されて姉妹の敵討譚が主となり、「慶安事件における幕府転覆」という大義の代わりに「南朝復興」という大義名分が付随的なものとして位置することになります。

このように、正成伝説は由比正雪が楠正成の子孫を自称したことをきっかけに、慶安太平記物と結合することになり、また慶安太平記物を媒介にして宮城野信夫の敵討譚とも融合することになります。以後、絵本読本『絵本敵討孝女伝』（享和元年〈1801〉刊、作者不明、岡田玉山画）と山東京山作『宮城野信夫／小説娘楠樹』（六巻、文化５年〈1808〉刊）においても、正成伝説と宮城野信夫譚を結合した形で成り立っており、慶安太平記物の色彩が完全に無くなっています。

ところが、後期読本の南朝復興物に到っては、宮城野信夫譚以外のほかの巷談・巷説と結合する作品が登場し、慶安太平記物や宮城野信夫譚によって表われた社会転覆や階級秩序の乱れといった反逆のイメージは影を薄くすることになります。

それでは、馬琴の後期読本『松染情史秋七草』と正成伝説の融合過程につい

て考察して見ましょう。

五．後期読本と正成伝説――南朝復興の物語への転換――

お染久松の心中事件と正成伝説を綯い交ぜにした曲亭馬琴の読本『松染情史秋七草』（文化６年〈1809〉刊、以下『秋七草』）は、先に考察した『碁太平記白石噺』が宮城野信夫の巷談と結合したように、お染久松の心中事件を題材にした先行浄瑠璃[16]と正成伝説が絶妙に絡み合っているという特徴が見られ、先行研究においては〈巷談物〉読本として分類され、主に先行浄瑠璃作品との影響関係を中心に考察されて来ました。しかし、実際には『松染情史秋七草』は南朝の忠臣である楠正成の伝説を世界とした〈史伝物〉としての特徴をも有しており、滅びた南朝側に加勢した者たちの後日譚を軸にして、物語の主題は南朝復興へと収斂していくことになります。『秋七草』のあらすじは次のとおりです。

楠正成の死後にも、楠正行・楠正儀兄弟は南朝の復興を目指して戦っていましたが、正行が討死した後、楠正儀は足利義満に降りました。ところが、正儀は軍学の秘書を南朝に残した子息正勝・正元につたえようと旧臣雑居兵衛を呼びます。しかし雑居兵衛は正儀に呼ばれたことが現在の主君和田正武の耳に入り、それが原因で追放されて正儀のもとへも行けず大和で油商丹五兵衛となります。彼の妻は正武の女秋野姫の乳母として留まるうち、正武滅亡の際姫と共に逃れて丹五兵衛に救われ、姫を娘お染として大阪へ出ます。一方、楠正元は将来の敗北を察して一子操丸を近臣窪六に託して遠ざけていましたが、自分は義満暗殺に失敗して討たれます。正元の首級を奪おうと都に赴いた丹五兵衛は、番卒と戦う中にちぎられた片袖を剣術の師範である山家税平に奪われます。山家はそれを口実にお染の婿になることを要求します。山家の強要を断われなくなった丹五兵衛は丁稚久松に言い含めてお染との不義を装わせます。久松は百姓久作実は正元の近臣窪六の子として養われた操丸で、悪人の手に落ちて流浪中、丹五兵衛に助けられたのでした。蔵に監禁されたお染久松の二人は互いの

素性と許婚者であることを知り、逃れ出て悪人に川へ投げ込まれましたが、野崎の観音、毘沙門天の尊像が身代りとなって助かり、駆けつけた旧臣達と吉野の奥へ向かいます。

『秋七草』においても慶安太平記物との関わりは完全に見えなくなりますが、正成伝説と実録の結合という点においては、宮城野信夫譚の代わりにお染久松の心中事件と結合している形になっており、以前の南朝復興物の踏襲と見られます。しかし、『碁太平記白石噺』が宮城野信夫姉妹の行動を追ってストーリーが展開し、姉妹の敵討譚が主となったのに対して、ここでは、「南朝復興」という大義名分が主となり、お染久松の心中事件は付随的なものになります。

また、山月庵主人作の『屏風怨霊四谷怪談』（天保6年〈1835〉刊）は『四谷怪談』と正成伝説を綯い交ぜにした作品ですが、この作品は登場人物の設定など、『秋七草』からの影響が見られ、南北朝の動乱を生き延びた楠家の遺臣たちの外伝が展開します。

この『屏風怨霊四谷怪談』や馬琴の『秋七草』においても、先行する『絵本敵討孝女伝』や『小説娘楠樹』と同様、そこに慶安太平記物としての内容が見られませんが、馬琴が南朝復興の物語から慶安太平記物を排除したのはなぜでしょうか。それは馬琴のもう一つの南朝復興物である『開巻驚奇俠客伝』（初集天保3年〈1832〉刊、四集天保6年〈1835〉刊）を考察してみると、その理由が見えてきます。

A.『開巻驚奇俠客伝』第三集巻之一

倩当時の軍功を思ふに、初　楠　正成が、纔なりける隊兵をもて、千剣破赤阪の城に籠りしより、東軍凡八十万、囲でこれを攻れども捷ず。こゝをもて忠義の毎、なほ官軍に眼を属て、その機を待もの尠からず。爾程に義貞・円心、東西に義旗を揚て、勤王の功虚からず。これに由て論ずれば、その功正成を第一とすべし。（中略）そが中に赤松円心のみ、軍功あれども賞を得ず。こはその子律師則祐が、大塔宮に仕へしを、准后の忌

せ給ふにより、歹く執成し給ひたるにや、佐用の荘のみ賜りて、播磨の守護を召放されにき。円心は這恨みにて、初尊氏が反逆の折、はやく賊首に随従て、那悪を資けしかば、官軍他に殺所を捕られて、戦ひ難義に及びしこと尠からず。これを思ふに円心は、初六波羅を攻たりしも、その身の栄利に做せしのみ、朝廷のおん与にはあらざりき。⑰

B.『開巻驚奇俠客伝』第二集巻之一

小六ははやく走り掛りて、項を抓み引よせて、席薦に鼻を搨着々々、怒れる声をふり立て、「やをれ安同、思ひ知るや。汝は素より脇屋殿に、結びし怨のありとしも聞えず、且職分にもあらざるに、不意に起りて撃まつりしは、是足利家の与ならで、栄利を料る小人の、忠義めかせし所行なるを、よくも思わぬ鎌倉の、管領に褒賞せられて、発迹しより民の膏腴を、絞りて飽まで驕奢を極め、賢を娼みて野上の翁を、害せんと計較たる、老奸積悪、天の憎に、逼りし応報愆たず、今助則が手にかけて、脇屋殿の冤魂を、慰めまつるそがうへに、民の蠹毒を刈払ひて、世の為亦人の与に、心を快くなすもの也。⑱

『俠客伝』において、馬琴は引用AとBの傍線部のように、「これを思ふに円心は、初六波羅を攻たりしも、その身の栄利に做せしのみ、朝廷のおん与にはあらざりき」や「是足利家の与ならで、栄利を料る小人の、忠義めかせし所行なるを」といい、私利を追求するものについて厳しく批判していることが分かります。馬琴の南朝復興物においては、南朝の復興や天皇への絶対的な忠誠こそが「善」として描かれており、それ以外の私利を追い求める者たちは「悪」として定義されています。このような馬琴の立場からみて、個人の出世や立身のために当時の社会不満勢力を利用して幕府転覆を目指した由比正雪は、大義名分において天皇のために南朝復興を目指す南朝の遺臣たちと同一線上に置くことはできなかったでしょう。

六．おわりに――反逆（幕府転覆）から再生（南朝復興）への転換――

このように、正成伝説が南朝遺臣たちの南朝復興の武勇伝として拡張していくのは、従来忠臣や智略家という面に光が当てられながら展開した正成伝説に新しい変化をもたらしたもので、その変遷を辿ってみると、その淵源には、楠正成に私淑し幕府打倒を試みた由比正雪の巷説という、もう一つのファクターが存在しています。つまり、由比正雪を主役とする慶安太平記物において、近世初期のアウトローたちの解放や革命のメタファーとして機能していた正成の物語は、慶安太平記物を媒介とした宮城野信夫譚との交わりを通して、遺臣たちによる南朝復興を目指す物語に変化していくことになり、それは『松染情史秋七草』のような〈稗史もの〉読本へと受け継がれていったのです。

[注]

①幕府関係の記録などには「由井」と書いたものも多いが、自筆とされる書状に「由比正雪」の署名がみられるので、ここでは由比とする。

②牢人払い・武家奉公構え・居住制限などがある。

③慶安４年（1651）４月将軍徳川家光が没し、十一歳の家綱が将軍職を嗣いだ。当時幕府の直属軍団である旗本・御家人に窮乏の徴があらわれており、また幕府の改易・減封の強行によって巷に投げ出された牢人の不満が募っていた。同年７月には親藩の三河刈屋城主松平定政が酒井忠勝を頂点とする幕政を批判し、改易に処せられるという事件もおきた。正雪はこのような社会の気運をみて牢人を語らい反乱を企てたと思われる。〈国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』（吉川弘文館）参照〉

④他に、『慶安太平記』『由比遠望実録』『慶安賊説弁聞書』などが成立している。

⑤中村幸彦「実録、講談について」（『中村幸彦著述集』第十巻『舌耕文学談』、中央公論社、1983年）。

⑥テクストは比較的書写年次の古い宝暦７年（1756）本（東京大学総合図書館所蔵）を参照した。

⑦ここでは実録として成立する前段階における物語の語り手を指す。

⑧楠正成は後醍醐天皇のみた不思議な霊夢によって初めて歴史の舞台に登場する。兵藤裕己氏によると、「史実がどうであったかはともかく、正成はじっさい、夢告でもなければ、天皇にその存在さえ知られない身分である。天皇に直接つかえる立場にもない河内の一土豪であり、太平記の身分カテゴリーにしたがえば、「臣」にたいする「民」である。」と、君臣関係の枠組みをこえた楠正成と後醍醐天皇の関係の特殊性を指摘している。（兵藤裕己『太平記〈よみ〉の可能性――歴史という物語』〈講談社、2005年〉）。

⑨前掲、『太平記〈よみ〉の可能性――歴史という物語』。

⑩後藤丹治・釜田喜三郎校注『太平記』二（『日本古典文学大系』35、岩波書店、1961年）

⑪前掲、『太平記〈よみ〉の可能性――歴史という物語』。

⑫『日本古典文学大辞典』（岩波書店）参照。

⑬竹田小出雲・近松半二（他）『太平記菊水之巻』（高田衛・原道生編集『近松半二浄瑠璃集』一、国

書刊行会、1987 年）
⑭前掲、『太平記菊水之巻』
⑮明和 8 年（1771）の『禁書目録』には『由井根元記』『由井実録』（『由井遠望実録』と同じか）と共に『慶安太平記』も見える。
⑯近松半二の「新版歌祭文」（安永 9 年〈1780〉）と菅専助「染模様妹背門松」（明和 4 年〈1767〉）、お染久松を題材にした馬琴の合巻として『膏油橋河原祭文』（文政 6 年〈1823〉）がある。
⑰横山邦治・大高洋司校注『開巻驚奇俠客伝』（『新日本古典文学大系』87、岩波書店、1998 年）
⑱前掲、『開巻驚奇俠客伝』

＊討議要旨

武井協三氏より、発表中に言及のあった浄瑠璃の『碁太平記白石噺』（安永 9 年刊）について、発表者は「ごたいへいきしらいしばなし」と読んだが、番付では「ごたいへいきしろいしばなし」となっており、後者の読み方が正しいと思う、との教示がなされた。板坂則子氏は、楠正成の伝説については読本や合巻の他にも、黄表紙等、ジャンルによって受容のされ方に違いはあるのか、と質問した。それに対し発表者は、近世の様々なジャンルに正成伝説が受容されており、例えば浮世草子では、当世化・好色化されることがあり、浄瑠璃では、正成だけではなく彼の家族が登場して、一族のドラマとして展開する、と回答した。